

## バルザック『幻滅』の生成過程について

### — 差異化と統合化 —

鎌 田 隆 行

バルザックの代表作の一つである三部作『幻滅』は、もともと『19世紀風俗研究』の『地方生活情景』の一作として着想され、執筆が開始されたが、当初の作品計画の枠組を遥かに超える大作として展開し、その後の創作活動に大きな影響を与えた。実際、同時代の社会を映し出す総合的作品として自作を位置づけ、多数の小説を書き上げていったこの作家にとって個別の作品の執筆と自作全体の統合化との関係は自明なものではなく、しばしば齟齬をきたすものであった。即ち、執筆途上で主題から細部に至るまで極めて大胆に変容を重ねていく個別作品の制作様態と、カテゴリー分けされた作品群が一つの全体を構成するという統合原理とが葛藤しあう生成空間こそがバルザックの創作の生々しい現場であったのだ<sup>1</sup>。しかし一見すると互いに相容れない原理の葛藤する力学圏であるからこそ、多層性を持つ作品が生成していったとは考えられないだろうか？ 本稿では『幻滅』の生成過程のクロノロジカルな推移とバルザックの他の作品計画との相互干渉の検証を通じてこうした特異な生成のダイナミズムの一端を明らかにしていきたい<sup>2</sup>。

現在残されているバルザックの作品生成関連資料の中で『幻滅』の題名が初めて姿を現すのは1833年10月に作家が愛人のハンスカ夫人に宛てた手紙においてである。そこでは『19世紀風俗研究』の構想が告げられ、八折版12巻で、『私生活情景』第三版、『地方生活情景』初版、『パリ生活情景』初版からなる壮大な計画が語られている<sup>3</sup>。また、創作ノート『思考、主題、断片』の一節ではほぼ同時期に書かれたと考えられる箇所には『地方生活情景』初版の具体的な構成が次のように記されている<sup>4</sup>。

『地方生活情景』初版の構成

第一巻。『ウジェニー・グランデ』、『ことづけ』

第二巻。『独身者たち』、『グランド・ブルテージュ』、『捨てられた女』、『柘榴屋敷』

第三巻。『醜女の恋』

第四巻。『通史断片』『幻滅』<sup>5</sup>

見られるように、『幻滅』は『通史断片』とともに『地方生活情景』の第四巻を構成する予定

となっている<sup>6</sup>。そしてほどなく刊行が開始された『19世紀風俗研究』の『地方生活情景』の序文(1833年12月)には『幻滅』に関する次の言及が見られる。

[...] 地方生活とパリ生活の対照を提示することによって、作品全体はより完全なものとなろう。パリは衰退に陥った存在を描く枠組になるのである。大都市においては、人生は偶然でもない限り若々しいものとはなり得ない。この点について、思索の首都は人間性の大きいなる退廃の完璧な一類型を供してくれるという利点がある。地方の最終情景(『幻滅』)は人生の二つの年代をつなぐ環であり、地方と首都を絶えず結びつける数多の現象の一つを示すものである<sup>7</sup>。

『19世紀風俗研究』においては巻号と刊行の順序は異なっており、巻号の順番では『私生活情景』、『地方生活情景』、『パリ生活情景』という配置である。この序文はこうした観点から『地方生活情景』の最終作である『幻滅』が『パリ生活情景』へのつなぎの役割を果たす作品になると予告しているのである。したがって、少なくともこの時点ではマクロレベルの構造化が個別の作品の内容を規定している現象が見られるのであるが、ここではそれを「枠組効果」と呼んでおこう。一方、『幻滅』の作中で描かれるべき細部については「数多の現象」という曖昧な表現にとどまっており、仔細な計画がまだ存在していないことを窺わせる。後で展開することになるジャーナリズムの主題はまだ微塵も感じられない。

実際、序文という公的な場で告知されたにもかかわらず、翌1834年には『幻滅』の計画は中断され、書簡などでもほとんど言及されなくなる。シュザンヌ＝ジャン・ベラルが指摘するように、『幻滅』は『19世紀風俗研究』第6回配本分として刊行が予定されていたので、他の配本計画の実施が優先されたのであろう<sup>8</sup>。その後、1835年10月にバルザックは書店主ベシェ夫人と契約を交わし、本作品の原稿の締切は1836年2月15日と定められる<sup>9</sup>。同11月には『19世紀風俗研究』第5回配本が行われ、その中の『パリ生活情景』序文には、「これまでの情景の最後を飾る研究である『幻滅』(『地方生活情景』)は、自尊心と虚栄心による打算から地方がパリを求めに来る様子を描いた」<sup>10</sup>とある。巻数と配本の順番が異なるため、未だ書かれてはいないが巻号としては先に位置する『幻滅』の要約的紹介がここで行われているのであるが、来るべき書物の内容は依然として明確には提示されておらず、野心的な地方青年の上京という、当時既にトポス化した筋立てを想起させるにとどまっている。しかしその一方で、同序文には次のような興味深い一節も見られる。

ここ(『パリ生活情景』)では何とも奇妙な絵画が展開されることであろう。作者は勇気を持って自作に降りかかってくる誹謗中傷を耳にせねばなるまい。もっとも、一番馬鹿げた批判は、パリと呼ばれるこの悪の禍根の広がりをも最もよく認知する者たち自身によっ

てなされるであろうが<sup>11</sup>。

ここで悪辣にして墮落した存在として告発されているのは明らかに批評家や書評子たちである。即ち『パリ生活情景』の序文は『幻滅』のプロジェクトとジャーナリズムの主題を並置していることになる。この時点で両者の融合が行われたという証左はないが、同一テキストにおいてこれらの二つの要素が隣り合い、潜在的な接触を果たしている事実については、ロラン・ショレによる精緻なプレイヤード版の注解をも含む過去の研究において看過されてきたのでここに明記しておきたい。

その後、当初設定された期限から大幅に遅延して『幻滅』の執筆が実際に開始されたのは1836年6月のことである。バルザックにとって予定していた執筆の開始が遅れることは極めて頻繁な出来事であったが、その原因としては、1) プランや筋書きを準備しない執筆スタイル(執筆構造化)であるために書き出してから細部に至る小説の内容を構築するまでに不確定要素が多く、とりわけ制作の初期において困難が生じやすいこと(目下のケースはこちらが原因であろう)、2) 校正刷りを多用する独特の執筆法であったために出版計画が整ってはじめて本格的な制作に取り掛かることができること、という二つの事情が挙げられよう。

さて、こうして現在読まれる『幻滅』の第一部にはほぼ相当する部分がようやく書かれることになるのだが、制作のクロノロジカルな進行状況を確認しておこう。

#### 【第一部制作クロノロジー】<sup>12</sup>

- ・1836年6月20日、サッシュェのジャン・ド・マルゴンヌ氏の城館にて本格的な執筆を開始。
- ・23日から26日までに40枚の草稿を執筆し、さらに3枚の草稿を執筆したところでパリに帰京。
- ・7月下旬から8月末までカロリーヌ・マルブティとイタリア旅行を行うなど、以後、作品の制作はしばし中断。
- ・8月9日、『19世紀風俗研究』の版權がベシェ夫人からヴェルデの手に渡ったことに伴い、原稿の締切がまず11月15日、続いて12月10日へと延長。
- ・11月のサッシュェ滞在時に制作作業を再開。6月に執筆したテキストの校正を行う。
- ・12月初めにパリに戻った後も校正作業を継続し、月末にようやく草稿の続きの執筆を再開。それ以降、この二つの作業を並行して進行。逐次校了措置を行う。
- ・年末、序文を執筆。
- ・1837年1月11日、草稿の執筆を終了。
- ・10日ほど後に最終校了。
- ・2月11日の『フランス全国書誌』(*Bibliographie de la France*)に記載される。

断続的ではあるが、それぞれの作業期間中は極めて密度の高い制作が行われた。実際の制作を経て作品の構想は当初の予定から大きく逸脱し、ここで刊行された、アングレームの美貌の青年詩人リュシアン・ド・リュバンブレが貴族のバルジュトン夫人と深い仲になり、駆け落ち同然にパリに出奔してそこで捨てられるという主軸を持った物語がもはや「序章に過ぎない」<sup>13</sup>ような大作品の計画が出現したことを作者は序文で読者に伝えている。

当初は地方風俗とパリ生活風俗の比較ということに過ぎなかった[……。]。しかし一家族の内幕や地方のみすばらしい印刷所の改革ぶりを嬉々として描写しているうちに、作者に逆らって領域が拡大したことがはっきりした。[……。]かくして『幻滅』はもはや、自分が偉大な詩人であると思い込んでいる若者や、彼に自信を抱かせておきながらパリの真只中で貧しく後ろ盾もないままに捨ててしまう女性のみに関わっているわけにはいかなかった。[……。]〔作者は〕突如として、今世紀の大きな禍根、即ち多くの存在や多くの素晴らしい思索を貪りつくし、地方生活の慎ましやかな信心に恐るべき反応を引き起こすジャーナリズムに思いを致したのである<sup>14</sup>。

ここには執筆構造化の作家にとりわけ生じやすい、制作段階における大規模な計画の変容の典型的な例をみてとることができる。かくして、『19世紀風俗研究』の最後の配本として同シリーズを完結させるはずであった『幻滅』は円環を閉じるどころか、逆にジャーナリズムという新たな小説の舞台の展開へとパースペクティブを開くという現象を招来したのであった。『人間喜劇』がバルザックの死によって未完に終わったことは誰もが知っているが、その原型となった『19世紀風俗研究』のこのような発展的な「未完」の現象についても改めて強調してしかるべきであろう。

さてその後、『幻滅』の続編（第二部）の制作は困難を極め、本格的な着手までにさらに二年を要することになる。しかしその間、バルザックは手をこまねいていたわけではなかった。新しい主題の出現を受けて、それまでの彼の諸作品にはあまり登場していなかったジャーナリストや作家の登場人物を相次いで創造し、複数の小説に登場させているのである。まず『セザール・ピロトー』（1837年12月刊行）には『非凡な女』（後に『役人』と改題）<sup>15</sup>で誕生した登場人物であるアンドッシュ・フィノの姿が見られる。ここでのフィノは『クリエ・デ・スペクタクル』で劇評を担当する若い記者であり<sup>16</sup>、幼馴染のゴーディサールの求めに応じてポピノの商売を後押しすべく広告文を執筆している。この人物に関連して新聞業界の内幕が語られており、バルザックは大衆に多大な影響を及ぼすジャーナリズムの権勢を強調している<sup>17</sup>。また、それは野心家の文学者（若手作家や芸術の才能を開花させることができなかった書き手）が凝集する場であり、軋轢を胚胎した場として提示されている<sup>18</sup>。他方、『セザール・ピロトー』が予告するフィノのその後の社会的地位の上昇に呼応して<sup>19</sup>、『ニュシンゲン商会』（1838年9月）では彼が新聞記者プロ

ンデを搾取する存在であったことがほのめかされる<sup>20</sup>。そして『しびれえい』(1838年9月)に見られる回顧的言説においては、この二人と『幻滅』の主人公リュシアンとの関係が語られている。

アンドッシュ・フィノはリュシアンが無報酬で働いていた新聞の事業主で、それはブロンデの協力、つまりアドヴァイスの鋭さと見識の深さのおかげで利益をあげていた<sup>21</sup>。

およそ詩人たるもの、年功を積んだ外交官のように、不遇だった頃に自分を迎え入れてくれ、困窮の際には泊めてくれた自称友人の二人に正面切って立ち向かうことができるだろうか？フィノとブロンデと彼は一緒になって墮落し、金を食い荒らす乱痴気騒ぎの中をころげまわったのである<sup>22</sup>。

かくして注目したいのはバルザックが文字通りモザイク状に作品を構築していったことである。『パリにおける田舎の偉人』で重要な役割を与えられるべきジャーナリストの人物網はまず搦め手から整えられ、またジャーナリスト生活以後のリュシアンを描いた『しびれえい』が先に発表されている。この時点でバルザックは来るべきジャーナリズム物語のために、フィノのもとでただ同然で働くブロンデとリュシアンが酒宴に興じて墮落の一途を辿るという筋立てを構想していたことが窺える。しかし、周知のように『偉人』はそうした内容に呼応するものにはならなかった。作品群が形成すべきマクロ構造に従って着想されたグランドデザインは、またしても作品の生成途上での変容によって反故にされることになったのである。

#### 【第二部制作クロノロジー】

- ・1838年冬、本格的に執筆開始。
- ・11月12日にスヴランと契約を交わし、原稿の締切は12月15日、出版は1839年1月末と決定。
- ・12月24日、スヴランとの間に新たな契約が交わされ、締切を翌年の1月15日に延期。
- ・翌年1月24日、未だ草稿を受け取っていない出版人から催促を受ける<sup>23</sup>。
- ・2月前半、草稿の半分程度を執筆。
- ・4月頃、膨大な修正作業に没頭。
- ・6月1日、校了。
- ・6月8日の『フランス全国書誌』に記載。

ジャン・ポミエが早くから指摘したように、『しびれえい』によれば凡庸なジャーナリストとして登場するはずであったリュシアンは、本作では一時とはいえ新聞界の寵児となり、また女優コラリーを愛人とし、後に死別するなど、異なる点が多数見られる<sup>24</sup>。他方、青年思想集団セナー

クルの登場や批評家、書籍商らのエピソードの導入によって、作品は 1820 年代前半を舞台として文学界全体を描き出す射程を獲得していったが<sup>25</sup>、その多くは執筆中に着想したものであることが生成資料から確認できる<sup>26</sup>。

しかしその一方で、執筆前には『幻滅』を完成させる『パリにおける田舎の偉人』<sup>27</sup>とバルザックが呼んでいたこの第二部は作品を完結させるには至らず、その役割を第三部に譲ることになる。この点について『偉人』の序文で小説家は次のように述べている。

作者はこの絵画が完成していないことを告知する心苦しさをまたしても味わっている。『幻滅』は未だ第三部が残されているのだ。主人公の上京やパリ滞在は言ってみれば三部作の最初の二日間であり、田舎への帰還がこれを完結する。この最終部は『発明家の苦悩』という題になるであろう<sup>28</sup>。

パリ物語として華々しい展開を見せた小説の舞台を再びアングレームへと戻すこと、それはかつて『19 世紀風俗研究』を形式的に破綻させた『幻滅』を再び『地方生活情景』へと帰属させ、自作全体のマクロな構造を再構築する試みに他ならない。かくして今度はむしろ枠組効果が作品を新たな生成運動へと向かわしめているのである。

『パリにおける田舎の偉人』の結末、たったそれだけでも作家を震え上がらせてしまうことであろう。ダヴィッド・セシャルや、リュシアンがパリで行動している間のアングレームでの彼の行動を引き立たせるような対照性を築くことがいかに困難なことかお察し下さい<sup>29</sup>。

『幻滅』の舞台は再びアングレームに移ります。リュシアンがパリでありとあらゆる過ちを犯している間、ダヴィッド・セシャルがエーヴ・シャルドンと送る地方生活に鮮やかなコントラストをつけねばなりません。悪行の不幸に対する善行の不幸であり、これは何とも困難なものです。『幻滅』は『人間喜劇』中の一大巨編となり、題名は正当化されることでしょう<sup>30</sup>。

ハンスカ夫人にこう述べるバルザックがいかに『地方生活情景』の枠組の維持に固執していたかが窺えよう。しかし第二部に匹敵する強度を持つことを目指したために、制作がなかなか進展せず、『人間喜劇』(1842 年刊行開始) 第 8 巻として『幻滅』第一部および第二部の校正を終えた 1843 年 5 月を迎えてようやくバルザックは第三部の執筆に着手することになる。なお、これと前後して第三部の新聞や単行本での発表という多様な出版計画も進められていった<sup>31</sup>。

## 【第三部制作クロノロジー】

- ・1843年4月末から5月初めにかけて銀行家のルイ＝フォルチュネ・ロキヤンと交渉。フェルヌから刊行する『人間喜劇』中の『幻滅』第三部を『エーヴとダヴィッド』と題することを条件に、同作をデュモン書店から単行本として出版する確約を得た<sup>32</sup>。
- ・シャルル・ディディエによる『レタ』紙創刊計画が具体化し、4月15日、ディディエはバルザックに連載を依頼。これを受けてバルザックは『ダヴィッド・セシャル』掲載を申し込み、契約はその後5月22日に締結。
- ・5月4日、執筆を開始。『しびれえい』続編の『エステル』とともに執筆は行われていく。
- ・5月半ばには草稿の半分が完成したが、月の後半は専ら『エステル』の執筆を進めた。
- ・6月4日、印刷作業を効率的に指示するためにラニーへの逗留を開始。
- ・6月9日、『レタ』紙の連載開始。同紙はその後破産し、『ル・パリジャン＝レタ』によって掲載を継続（8月14日まで）。
- ・7月1日、執筆作業終了。
- ・7月29日、『幻滅』第三部の最終配本。
- ・11月4日～8日頃、デュモン版の単行本を刊行。

ここに見られるように、『しびれえい』の続編で後に『浮かれ女盛衰記』に組み入れられることになる『エステル』と並行して執筆が行われおり、両作にまたがるリュシアン・ド・リュバンプレの物語が接合され、さらに新たな展開も書き継がれている。『人間喜劇』内の作品として『幻滅』を完結させたこの第三部は新聞にも連載され、かつ単行本としても刊行されたが、上記にあるように契約上の理由から題名が選択されており、バルザックが当初から本エピソードに充てようと考えていた題名（『発明家の苦悩』）は単行本の題名として用いられ、『人間喜劇』版は『エーヴとダヴィッド』と題されている（バルザックが『人間喜劇』の再版を目指して自ら所蔵する版本に修正を記したいいわゆる『フェルヌ修正版』において『発明家の苦悩』に変更）。

長きにわたる紆余曲折を経た『幻滅』はこうして『人間喜劇』の一作品として刊行の運びとなり、第一部～第三部を通して地方～パリ～地方という構造が構築され、『地方生活情景』の枠組に帰着することになる。ところが、バルザックは新たに付したユゴー宛の献辞で本作品のジャーナリズム批判の射程、即ちパリの社会現象を描いた物語としての意義をひたすら強調しており、本文全体の『地方生活情景』への（再）帰属化の実現に反してパラテキストとしての献辞が不協和音を奏でていると言える<sup>33</sup>。ここでバルザックがそうした献辞（むろん読者に対する序文的言説である）を著したのは、『パリにおける田舎の偉人』に対するジャーナリストたちの激烈な批判に対する再批判の意味合いがあるのであって<sup>34</sup>、ワーク・イン・プログレスで進められてきた作品に対する生々しい受容の痕跡が再帰的に作品の境界部に書き込まれているのである。



さて最後に、『フルヌ修正版』における『幻滅』の改訂について一瞥しておきたい。本作が蒙った修正の規模は比較的小さいが、既に挙げた第三部の題名の変更に加え、以下の二点は特に重要である。まず再登場人物網の強化が作品全体を通して行われている。とりわけ登場人物の多い第二部においては、端役や実在の人物が再登場人物に置き換えられたり、初版以後に創造された人物が登場するごく短い場面を挿入したりするおなじみの手法が多く適用されている<sup>35</sup>。他方、第三部に配置されていた製紙法についてのダヴィッドの長台詞は第一部に移され<sup>36</sup>、このことによって作品全体がエキリチュールをめぐる作品として、即ち書物や文学的言説をめぐる自己言及的な作品としての美学性を強めることになる。ちなみにフルヌ版作成の際には第一部と第二部を校了した後で第三部を執筆したので、作品全体の有機性を高めるこうした再構造化は不可能であった。バルザックは逐次発表してきたフラグメントを積み重ねる形で自作全体の統合を目指したが、モザイク的にいったん統合された作品はその新たな構造化の可能性を再読を行う作者に提示していったのである。

以上のように、『幻滅』の制作過程の検証はバルザックの作品生成のメカニズムの一端を明らかにするものである。バルザックの作品制作においては、個別の作品を有機的な一つの全体に統合しようとするマクロレベルのプロジェクトと、執筆行為を通して得られる新たな着想を活かして小説テキストに厚みを与えていく詩学という、本来は相反するはずの二つの原理を抱えているが、この両者の葛藤が絶えず個別作品の制作行為を活性化し、また他の作品との相互干渉を招来したことで、美学的な多様性と重層性を結実させたエキリチュールが生成していったのである。

- 
- 1 この問題提起については次の拙論を参照されたい。《Enjeux et paradoxes de la composition hétérogène chez Balzac》, 松澤和宏編「統合テキスト科学の構築」第3回国際研究集会報告書、名古屋大学、2004、pp.49-57.
  - 2 『幻滅』の制作のクロノロジカルな推移については複数の先行研究が詳細を説明しており、実証的な事実確認に関して本稿はこれらに負うところが大きい (cf. Suzanne Jean Bérard, *La Genèse d'un roman de Balzac : Illusions perdues (1837)*, Armand Colin, 1961, 2 vol. ; Roland Chollet, « Histoire du texte », Balzac, *La Comédie humaine*, nouvelle édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1976-1981, 12 vol. (以下 *Pl.* と略), t.V ; Stéphane Vachon, « Chronologie de la rédaction et de la publication d'*Illusions perdues* », dans Françoise Van Rossum-Guyon (dir.), *Cahiers de recherches interuniversitaires néerlandaises* 18, 1988, *Les Travaux et les jours d'Honoré de Balzac*, Presses Universitaires de Vincennes/Presses du CNRS/Presses de l'Université de Montréal, 1992 ; Roger Pierrot, *Honoré de Balzac*, Fayard, 1994)。ここではこうした先行研究の寄与を参照した上で、我々自身による資料調査の成果を活かしつつ、それらの新たな関連付けを試み、バルザックにおける多層的な生成運動の様態を浮き彫りにすることを試みる。
  - 3 *Lettres à Madame Hanska*. Textes réunis, classés et annotés par Roger Pierrot, Laffont, « Bouquins », 2 vol., 1990 (以下 *LHB* と略), t. I, p. 65.



- 4 ゴスランとの出版交渉が1833年9月に挫折した後、バルザックは10月に『19世紀風俗研究』の出版をベシエ夫人のもとで取り付けた。したがってプランが書かれたのも同時期であると考えられる。Cf. *Correspondance*. Textes réunis, classés et annotés par Roger Pierrot, Garnier, 1960-1969, 5 vol. (以下 *Corr.* と略), t.II, p.394.
- 5 Maurice Bardèche (éd.), *Pensées, sujets, fragmens*, Honoré de Balzac, *Œuvres complètes*, édition nouvelle établie par la Société des Études Balzaciennes, Club de l'Honnête homme, t.24, 1971, p.687, folio 33.
- 6 実現された『19世紀風俗研究』配本は次の通り。
  - ① 5-6巻：刊行者ベシエ、1833年12月中旬。『地方生活情景』第1巻、第2巻。
  - ② 10-11巻：ベシエ、1834年4月19日。『バリ生活情景』第2巻、第3巻。
  - ③ 3-4巻：ベシエ、1834年9月。『私生活情景』第3巻、第4巻。
  - ④ 1・12巻：ベシエ、1835年5月2日。『私生活情景』第1巻、『バリ生活情景』第4巻。
  - ⑤ 2・9巻：ベシエ、1835年11月1日頃。『私生活情景』第2巻、『バリ生活情景』第1巻。
  - ⑥ 7-8巻：ヴェルデ、1837年2月。『地方生活情景』第3巻、第4巻。
- 7 *Pl.*, t.III., p.1521.
- 8 Bérard, *op.cit.*, t.I, p.232.
- 9 *Corr.*, t. II, p.730.
- 10 *Pl.*, t.V, p.1410. このテキストは1835年8月30日付になっている。
- 11 *Ibid.*
- 12 以下、箇条書きの箇所については上述の先行研究の情報を整理したものであり、とりわけプレイヤード版およびベラルの記述に多くを負う。
- 13 序文より (*Pl.*, t.V, p.110)。
- 14 *Ibid.*, pp.110-111.
- 15 1837年7月『ラ・プレス』に発表。書店での刊行は1838年9月。
- 16 *Histoire de la grandeur et de la décadence de César Birotteau, parfumeur, chevalier de la Légion d'honneur, adjoint au maire du 2<sup>e</sup> arrondissement de la ville de Paris, etc.*, l'éditeur [Boulé], 1837 [daté:1838], 2 vol., t. I, p.257.
- 17 *Ibid.*, t. II, pp.72-73.
- 18 *Ibid.*, t. I, p.292.
- 19 「3ヶ月後に彼はある小新聞の編集長になった」(*Ibid.*, t. II, p.74-75)。
- 20 *Fragmens des Études de mœurs au XIX<sup>e</sup> siècle. La Femme supérieure, La Maison Nucingen, La Torpille*, t. II, p.196.
- 21 *Ibid.*, p.363.
- 22 *Ibid.*, pp.365-366.
- 23 *Corr.*, t. III, pp.541-542.
- 24 Jean Pommier, *L'Invention et l'écriture dans La Torpille d'Honoré de Balzac*, Droz/Minard, 1957, 1<sup>ère</sup> partie, ch. II, « Rubempré à Paris », pp.70-91.
- 25 もっとも、モデルとなった人物や小説内で描かれる新聞の様態など実際にはむしろ作品が書かれた七月王政期のジャーナリズムの痕跡が窺えると指摘されている (Marie-Eve Thérénty, « Quand le roman [se] fait l'article. Palimpsestes du journal dans *Illusions perdues* », in José-Luis Diaz et André Guyaux (dir.), *Illusions perdues*. Actes du colloque organisé par la Société des études romantiques et l'Université Paris-Sorbonne, Presses de l'Université de Paris-Sorbonne, 2003, p. 239)。
- 26 例えばセナークルをめぐるエピソードは執筆途中に着想され、それまでに書いた草稿を増幅する形で取り入れられたことはアンドレ・ラコーの指摘で早くから明らかになっていた (André Lacaux, « Le premier état d'*Un Grand Homme de province à Paris* », *L'Année balzacienne*, 1969, pp.187-210)。

実際、書籍商や女優などその他の多くの要素に関しても、創作段階において次第に重要な役割を付与されていったことが草稿などの資料から判明する。これについては次の拙著で詳述した。*La Stratégie de la composition chez Balzac. Essai d'étude génétique d'Un grand homme de province* à Paris, Surugadai-shuppansha, 2006.

- 27 *LHB*, t.I, p.383.
- 28 *Pl.*, t.V, p.112.
- 29 *LHB*, t.I, p.603.
- 30 *Ibid.*, p.620.
- 31 デュモン版（単行本）の清刷を『レタ』紙の連載や『人間喜劇』第8巻用に入稿する（後述箇所参照）という話であったようだが、ロラン・ショレが指摘するように、実際には校正刷りはパリとラニーの印刷所を行き来したらしく、小説のある箇所では前者の版が後者の先行テキスト、また別の場所ではその逆、という具合に時間的・生成ステイタス的な前後関係は決定不可能なほどに錯綜している（R. Chollet, « Histoire du texte », *Pl.*, t.V, p.1130）。
- 32 フランス学士院ロヴァンジュール文庫所蔵の覚書より（Lov. A255, f°13v°）。
- 33 この献辞については別のところで詳しく分析した（« Dédicace balzacienne. Fonction préfacielle et tensions interactives paratextuelles », 愛知文教大学『比較文化研究』第5号、2003、pp.1-17）。
- 34 『パリにおける田舎の偉人』に対する当時のジャーナリストの反応については次の論文を参照のこと。Nicole Billot, « Balzac vu par la critique (1839-1840) », *L'Année balzacienne*, 1983, pp.226-297.
- 35 例えば第二部ではラマルチヌとユゴーの名がカナリスに置き換えられている（« Néanmoins Lamartine et Victor Hugo <Canalis> percent [...] » ; *Illusions perdues*, in Balzac, *Œuvres complètes illustrées*, publiées sous la direction de Jean-A. Ducourneau, les Bibliophiles de l'Originale, t.VIII, 1966, p.195）。
- 36 *Ibid.*, p.401 *sqq.*

*Résumé*

« *Notes sur la genèse d'illusions perdues* de Balzac : différenciation et intégration »

Takayuki KAMADA

La genèse des romans balzaciens est fondamentalement paradoxale en ce qu'elle renvoie à une ambitieuse visée d'intégration et de classement de l'ensemble des pièces dans ce qui sera *La Comédie humaine*, qui s'accompagne d'une esthétique délibérée d'intensification successive, donc différenciatrice, des textes. Or le dossier génétique d'*Illusions perdues* fournit une matière éclairante pour s'interroger sur le fonctionnement de ce dispositif, à première vue conflictuel. En effet, un examen global du dossier révèle qu'un mouvement de va-et-vient se poursuit, au fil d'une longue genèse allant de 1836 à 1843 et continuellement ouverte sur une nouvelle édition à réaliser, entre les deux principes contradictoires de l'intégration (effet de cadre) et de la différenciation (mutation réflexive du texte). Loin de freiner la création de Balzac, un tel mouvement donne à cette dernière une complexité esthétique inédite, sollicitant successivement, folio après folio, édition après édition, prise de dimension, stratification de sens et répercussions intertextuelles dans et par les œuvres en devenir. Paradoxale mais efficace, l'interaction des niveaux dans la création balzacienne particularise ainsi l'écriture de cet écrivain.